

THE
Olympic Golf Club



FEBRUARY 2002 VOL. 5

ファッションとゴルフ

出席者 **伊藤智教**
伊藤郁子

聞き手 **五嶋雅徳** (フェローシップ委員長)

「お待たせしました」と言って颯爽と現れた伊藤(智)さんは、レンガ色のコーデュロイのブレザーに黒のパンツ、茶の革靴とベルト、グレーのシャツに同系色のネクタイ、と見事にコーディネートされた姿だった。さすがファッション界のリーダーと感心したら、それだけではなくゴルフはもちろん、料理、音楽、政治、経済と多方面に豊富な話題をお持ちでした。笑顔のすてきな奥様ともども楽しいひとときとなりました。(五嶋)

石を売るよりダイヤを

五嶋「うちの家内に今朝『ライカの社長さんに会うんだ』と話したら、『まあすてき、わたしなんか若い頃、高くって買えなかった』と言ってました。そんな時期があったんですか」

伊藤智「ええ、そうですね」

伊藤郁「私ら二人で始めたでしょう。小さいし、誰もいてないし、するんだったら高級品を、と言うことで。石を売るよりダイヤを売ろうと、ね。だからいまだに高いですよ。前はもっと高くって、社員が『テレビより高いシャツです』と言ってました」

伊藤智「ま、昔は高いのもけっこうあったんですね。今は安くなってますよ。シルクのシャツで3万円ですか。昔だと8万円から10万円しました。天皇陛下にシルクのアロハを高島屋から献上したことがあって」

「そのころは高級品をやっているところが日本にちょこちょこありましたけどね。今は少なくなりました。ライバルというライバルがほとんどなくなったと言う感じがします」

社名はライカ犬から

五嶋「私、長いこと新聞記者してまして、失礼とは思いましたが、いろんな方に伊藤さんのお話を聞いてきました。昭和34年に株式会社ライカを作られたんですね。」

「その前はライカ商店。スプートニク2号(ソ連の人工衛星)に乗った犬から取られたんですね」

伊藤智「ええ、そうです」

五嶋「われわれの世代でファッションのビジネスに取り組まれるとは、驚きです。社員の募集要項を読ませていただいたら、ファッションが好きでないとだめだとありますね」

伊藤智「ぼくはね、本当はやりたくなかった。在庫のない商売がしたくてレストランを始めたんですよ。イタリアンレストランからうどん屋まで」

五嶋「ほう。僕ら戦前の男はファッションという女性のものだという意識があるんですが」

伊藤郁「最初はね、紳士物は私がやったんです。婦人が作る紳士物と言うことでライカの売りにし



たんです。婦人物が忙しくなって、(主人に)手伝ってもらわないといかんようになって」

五嶋「ああ、そうですか」

伊藤智「僕はね、作る方と売の方に回って、前にあった繊維会社の延長線上なんですけど、やり方を変えて。春夏冬とファッションはあるわけですから、冬物だけじゃなく、そこらをうまく切り替えて、45年続きました」

ブルーノート東京

五嶋「社長はまさに立志伝中の方で、人生の達人に见えます。ファッションはもちろん音楽はお出来になるし……。ブルーノート東京もやってらっしゃるんですね」

伊藤智「音楽はね、息子(ライカ専務・陽介氏)なんです。息子が好きでね」

五嶋「ブルーノート、すごいですね」

伊藤智「でも、音楽に関しては東京と大阪ではちがいます。大阪はだめですわ。なんぼいいミュージシャンが来ても、大阪はだめ。東京は一週間、立ち見を入れられないかんぐらいになる」

五嶋「われわれも催し物をやりますが、大阪の入場者は東京の3分の1です。最近では4分の1になりつつあります」

伊藤智「東京ではいっぱいになって苦情が来るぐらいに予約が取れないんですが……」

「田中さん(近鉄百貨店社長の太郎氏)も、東京のオープニングに来ていただいて、あの時はけっこう華々しい顔ぶれでした。巨人の松井とか、藤原紀香、堺正章、古田(ヤクルト)も嫁はん連れて来てました。テレビカメラが並んで、僕なんかが入っていても、知らん顔。芸能人を待っているんです」

五嶋「われわれも外人のタレントを呼ぶときには大変な苦勞をするんです。ほとんど赤字です。それをまさに、日本の方が、ブルーノートを東京でやっていらっしゃる。すごいですね」

クラシックカーが30台

五嶋「多彩な趣味のなかにクラシックカーもあるとうかがいましたが」

伊藤智「バブルと一緒に何十億かつぎ込んで、そのまま、ほったらかしですわ」

五嶋「どういう車をお持ちですか」

伊藤智「いろいろですね。プガッティとかね。買うたときは、1台3億5千万とか2億前後のけっこう古い車があるんですよ」

五 嶋 「全部で何台、あるんですか」

伊藤智 「30台くらいですかね。これも息子が好きなんですよ」

伊藤智 「ま、僕もきらいじゃなかったんです。息子がヨーロッパへ行って1日つぶしてフェラーリ見に行ったときに、赤いやつを買うたんです。そのフェラーリに乗ってたんですが、渋滞にひっかかったら大変で、どうでもいいわ、という気になって。今、乗っているのはベントレーです。足は伸ばせるし、自由自在に動くし、もう20万キロ走ってるんですよ」

五 嶋 「ほうー。昨年ロンドンへ行きましたときに、ベントレーの展示場がありまして、5、6台展示してあったかな。日本人だから金持ちに見えたんですかね、『どうぞ、どうぞ、住所はどこか?』と大変でした。(笑い)。ロールスロイスは貴族の車だけど、ベントレーは若い人が乗る攻撃的な車のシンボルだというんですね。F1で最初に勝ったのもベントレーらしいですね。そういう話をしきりにするんです。ベントレーというのはすごい車だと思いました。」

ゴルフは好き?

五 嶋 「さて、ゴルフの会報なので、社長と奥様に、ゴルフに対していつも思っている話を聞かせていただければ……」

伊藤智 「ま、楽しく愉快にやることやな、と思います。僕はシングル違いますから、そんなにゴルフを一生懸命やろうという気持ちもありません。しかし、ものすごくゴルフが好きかと言うたら、ま、嫌いじゃないですわな(笑い)。よう行ってますし、10年、20年前には、シングルになりたいと思った事もあった。けどなんぼやっても、これは素質ですね」

五 嶋 「楽しくやろうと言うことですね。どういう方々と一緒ですか? メンバーの方は多いですか?」

伊藤智 「友達関係ですか。伊藤忠の大幹部だった堀田さん(前理事長)もね、やろうというんですが、日にちが合わんですわ。互いの空いてる日が合わん。岩本さん(研修会会長)も、昔はようやっていたのに最近は日にちが合わん。岩本さんとはずっとスクラッチでやっていた」

7日連続でゴルフ

五 嶋 「ゴルフ場での珍談、奇談はありませんか。海外の話でも」

伊藤智 「海外では去年、7連チャンがあります」

五 嶋 「うわっ、7日間ぶっ通しですか? どちらで」

伊藤智 「ラスベガス半分とロス(ロサンゼルス)の近くで半分。4組で行ってたんですよ。1組だけ7日目はリタイアされました。でも、カートに乗ってボールの所まで行くんですからね。朝8時にスタートしたら12時には上がって、帰ってゆっくり出来るんです」

五 嶋 「ふーん」

伊藤智 「今年と同じメンバーで6連チャン」

五 嶋 「へえーっ、お元気ですね。アメリカが多いんですか」

伊藤智 「たまたま2年連続して行ったんです。それとラスベガス行ったらカジノがありますから。けっこう、好きな方なんです」

伊藤郁 「だいたい今までね、ヨーロッパにずっと行ってました。けど、仕事ですからクラブ持って行きませんし……」

五 嶋 「イタリアが多いんですか」

伊藤智 「イタリア、フランス周辺がね」

伊藤郁 「最近は行かなくなりましたが、昔はずっとイタリア回って、アメリカ回っても、ゴルフは一切しなかった。シーズンのいいときはゴルフがまったくできなかった」

五 嶋 「そうすると、今はご夫婦で月一回ぐらい回られるんですか」

伊藤郁 「だいたい、日曜日やね」

伊藤智 「オリンピックの時は一緒に行ってるんですよ。私、まだまだ、3年5年は6連チャン、5連チャン、出来ますよ。気候がいいときに行ってますから。前は、バンコクへ行っていました。堀田さんがバンコクで何連チャンかやったりと聞いて『ようあんな暑いところでやるな』と、思っていました、1時間飛行機に乗ってチェンマイへ行ったら、日本で言うとお阪と蓼科くらい違うんです。涼しいんです。そこまで行ったら日本人は居ないだろうと思ったら、日本人ばかり(笑い)」

五 嶋 「いやあ、わたしもね、この間ニューヨークへ行って隣のニュージャージーに住んでいる息子の嫁のご両親とゴルフをしたんですが、ハワーズっていうゴルフ場に行ったら『いらっしやいませ』と日本語。5、60人入っていたんですが、100パーセント日本人。で、支配人がまさに神戸弁なんですな。『ご出身は?』と聞いたら東灘で、どこで修業したと聞いたら芦屋カントリーだという。アメリカに行ったような感じがしませんでした」

伊藤智 「ハワイでも日本のゴルフ場に居るんかいな、と思うときありますね」

オリンピックが一番いい

五 嶋 「メンバーの代表としてオリンピックゴルフ倶楽部への注文があれば……」

伊藤智 「この間の大川理事長の快気祝いの時の食事、よかったですね。目の前に上林さん(孝典氏・キャプテン)がおって『食事ようになりましたね』『昔はまずかったですよ』(笑い)と話しました」





五嶋「ワハハハ」

伊藤智「それと、あれが素晴らしいと思うんですね。開場記念会ね。上がってきて着席して一通り食べたいものを食べて、と言うのがおしゃれですよ。よその開場記念行ったら、立食で、遅くに上がってきたら何も残ってない」

五嶋「ええ、ええ」

伊藤智「僕はだいたい5人で回るんですが、皆、走ってばかり。ゴルフは下手でも早くしろ、とうちの若い者には全部言ってます。下手で遅いの後ろに回ったら、たまらんですよ。堀田さんもそうなんです。あの人は怒りますからね。『おまえ、下手なくせに歩くな、走れ』(笑い)と言ってね」

五嶋「オリンピックゴルフ倶楽部のよさですね。5人で回らせてくれるのは」

伊藤智「もし、趣味は何かと聞かれると、ゴルフしかないんですが、では仕事とゴルフとどっちが趣味かと言われたら仕事の方が趣味ですね。もの作りというか。ここのデザインルームに1日何回、行ったり来たりするか」

五嶋「オリンピックゴルフ倶楽部について。ここをこうしたら、良くなるんじゃないとか。奥さんと社長から見られた点を」

伊藤智「あちこちのゴルフ場に行きましたけど、オリンピックゴルフ倶楽部が一番いいんじゃないかと思えますよ」

五嶋「理事長がきちっとしてらっしゃるから、あのコースは何かきちっと筋が通ってますね。従業員のみなさんも」

伊藤智「この間、若い子がシャツ出してゴルフしとったけど、でもある程度はしょうがないですかね。これだけゴルフ人口が増えたら」

五嶋「日本のプロゴルファーの、有名な選手がマスターズなんか行きて、ああいうファッションセンスはどういうものでしょうか」

伊藤智「行き過ぎてますよ。色が派手って言うか、柄が派手って言うか、サイズは合っていないし、デレーツとして、尾崎なんかまるでセンスなしですね」

五嶋「品性のようなものが必要なんですか」

伊藤智「ゴルファーでファッションがいいのは深堀圭一郎なんかいいですよ。女子プロにもたくさんいますね」

ライカは生きている

五嶋「ところで、ライカ犬を探す運動をされてます

ね。ドイツかオランダで最終的に見つけ出したという。僕はすごい発想だと思ったんです。ライカ犬がスプートニクに乗って最初の1匹は死ぬんですけど、2回目が生きて、子供を産んで、その生き残りがいないかと言うことで〈ライカは生きている〉と言うタイトルで会社の30周年キャンペーンをなさった。おそらく広告代理店のコピーだと思うんですが」

伊藤郁「博報堂やったかな」

伊藤智「けっこうお金かかったんですよ」

五嶋「でしようね」

伊藤智「代理店のけっこう好きな人がいてね。あっちこっち探して、だいぶ、日にちかかってましたよ」

五嶋「こういう発想が素晴らしい。ファッションも素晴らしい、かっこうよくて、ぼくなんかもう、野暮ったくて(笑い)」

小泉首相にももの申す

五嶋「近鉄の田中さんが息子さんの事をものすごくほめてらした。2代目をあんなにうまく育てている経済人はいないと」

伊藤智「息子は田中さんとは何かしらんが気が合う」

五嶋「田中さんは小泉首相はもう賞味期限が切れると。俺に任せませと書いていたのにいっこうによくならない。何かしなきゃいけないと言うんです。その中の一つに、彼の提案ですが、消費税を全廃したらどうか。景気が戻ったら1年ごとに1パーセントずつ上げていって、最終的に5パーセントに戻したらいい、そういうことが小泉さんは出来る人だと思っていたのにいっこうにやりやらん、と」

伊藤智「僕も実はちょっともういやになっている。進む方向、言うてる事は格好いい、パフォーマンスもいい。ところがね、構造改革をどういう風にやるかと言うことが見えてこない。景気回復はその次やとまだ、言うとりますよ。景気対策は二の次で、国民に辛抱してもらおうという」

五嶋「ええ、ええ」

伊藤智「景気を良くすることが前提であって、悪くなりすぎて構造改革なんてあり得ないですよ」

五嶋「2002年の経済の見通しはどうですか」

伊藤智「悪い。ものすごく悪いです。今の小泉内閣ではよくなりっこないです。景気回復に何も手を打たないでしょ。小泉さんの構造改革一本やりを変えていかないかんでしょうね」

五嶋「ライカは関西が地盤です。関西の経済をこうしたらいい、と言うご意見はありませんか。このあたり(大阪市・南港北)はウオーターフロントといって関西でも一番期待された地域です。ここの活性化などを話されることはあるんですか」

伊藤智「一時は、売り手市場で大阪市がね、高飛車でしたけど、今は買う人が売りに出しても売れない」

五嶋「何とかしてもらわなければ困りますね」

伊藤智「そうですね。地下鉄が一本伸びかけて、とん挫しました。行政がもっとしっかりしてくれないと困ります」

安藤忠雄設計の本社ビル

五嶋「このビルを設計された安藤忠雄さんとはどういう関係で」

伊藤智「息子の専務がこのビルをやる前に安藤さんを知ってて、神戸の北野でショップをやるときにお願いして」

五嶋「ふん、ふん」

伊藤智「その次に鰻谷（大阪市南区の店舗）やりまして。芦屋に住もうかなと思って芦屋に家建てて、その最中にここをやったんです」

五嶋「そうですか。ファッション産業にふさわしい素晴らしい建物ですね」

「ところで、私の友人に藤田君（博司氏）と言うテナーサックスの名手がいるんですが、伊藤さんもお知り合いだとか。どういうおつきあいですか」

伊藤智「あの人がアローオーケストラでやってる頃の知り合いに、娘の婿さんの親がいて、それで知ってるんです。娘も息子が結婚式の時に藤田さんが来てくれてるんです」

伊藤郁「結婚式の歌をね」

五嶋「私も同じ年の仲間でゴールド会というのをやって、しょっちゅう会ってるんです」

伊藤智「夜は商売して、全日空ホテルのプールで泳いで体を鍛えているらしいですね」

五嶋「僕らのコンペでは、朝4時まで仕事してたと言って、優勝したりするんですよ。腹立ちますよ」

伊藤智「ゴルフ、うまいですね」

五嶋「ええ」

伊藤郁「肺活量がすごいです」

伊藤智「泳いでいるから。それであっという間にシングルになりましたから」

料理もデザインもセンス

五嶋「料理の腕前も大変なものだと聞きましたが」

伊藤智「ええ、昔から働いててね、こっち（と郁子さんを指さして）が仕事しているから自分の料理を作って食べることから始まって、料理は嫌いじゃないですね。どうしても、こっち（再度郁子さんを指して）がへたやったら、こっち（自分）が上手になる（笑い）」

伊藤郁「フフフ」

五嶋「何が得意ですか」

伊藤智「包丁を出して作るとしたら出刃か刺身ですからね」

五嶋「そりゃ、本格的だ」

伊藤智「本焼きの出刃包丁なんか、素晴らしいのがあ



りますよ。でも、使ったらすぐにしまいます。人に使われたらかなわんから」

五嶋「ほうっ」

伊藤智「料理は切れ味です。野菜を切ってもなにを切っても」

五嶋「ファッションと通じる場所はありますか」

伊藤智「あります。あります。かなり、あります」

五嶋「料理は目で見て食べるところがありますね」

伊藤智「見た目がまずかったら、よう食わん。やはり、見て楽しんで食べる」

伊藤郁「コックの味覚とデザイナーの感覚は一緒ですね。デザイナーの、色音痴は十年経っても直らない。コックさんの味覚も同じですね」

伊藤智「器用か不器用かですね。コックは器用でなかったらいかん。僕は家で作るときは、調味料の量を量ったりしない。ぼんぼん入れたら、もう、最高のもんが出来上がってます。バランス感覚です。ファッションと一緒になんです」

五嶋「匙で何杯ということをしらないんですね」

伊藤智「よく、味見しないんですかと聞かれます」

五嶋「ゴルフ場に入っているような同じ系列のレストランで店によって味が違うのはコックさんの差なんですね」

伊藤智「うちの会社の社員食堂にも文句言うんです。米まずいよとかね」

五嶋「オーナーに言われたら、皆震え上がるんじゃないですか」

伊藤智「おかずはちょっとぐらいますぐてもいいから、米だけはええ米使えと言うてるんです。米がおいしかったら、つけもんででも食べられる。家では家内の作った料理は食べない。全部自分で作る」

五嶋「しかし、まあ、ファッションがもちろん本業ですが、音楽もゴルフも経済も、子育ても、食べることも、音楽もすごい。関西の経済人にこういう方はいない」

まさに人生の達人

伊藤さんは私より5つ年上だが、多趣味で多才。しかも、お元気でいらっしゃる。時に辛口の批評も飛び出すが、年輪の積み重ねから出る言葉だと、納得させられました。人生の先輩として見習いたい。これからも、関西経済のため、また、オリムピックゴルフ倶楽部のため、ご活躍を祈りたい。（五嶋）



1991年（平成3年）、筑波ゴルフクラブで開催された第76回日本アマチュアゴルフ選手権大会でのことである。同コースは1959年開場で佐藤 昌氏設計の名作で、平坦な地に松の大木が茂った林間コースで直線と曲線、クリークやバンカーの配置等で加罰というよりは戦略性に富んだ素晴らしいコースである。

その当時、私自身はオリンピックゴルフ倶楽部の開発、造成に専念していたので3年程は公式戦に出場してなかったが、当倶楽部開場後運営も落ち着いてきたので、長年振りに出場してみることにした。若い現役の選手と一緒にプレーし自分の体力がどの程度衰えて飛距離が落ちたか、技術的にどうなのかが知りたく試みることにした。初日のスタート前、鍋島直要 競技委員長とは久方振りにお逢いしたのでご挨拶を交わした後、鍋島氏はニコニコ笑いながらこれから一緒にプレーする二人の選手の紹介をして頂いた。「はい、息子さん、はいお孫さん、三世一代一家で仲良く二日間ゴルフを楽しんでください。」同伴する選手が私の実の息子と同じ年頃の40代の紳士と10代の高校生だったのである。そして、大正生まれ大会最年長65歳のおじいさんの私と三人で二日間のプレーを和やかに清純な気持ちでプレーを楽しむことが出来たのである。傍から見ればごく普通の家族同士のプレー、公式戦競技中とは思えない程ほのぼのとした情景だったことでしょう。

今回の出場により第一線の公式戦にも拘わらず年齢、体力、ハンディの差がありながら対等に戦うことの出来るスポーツは、ゴルフ以外では考えられないことであり、これこそ正にゴルフの素晴らしさ、醍醐味であることを再認識させられました。それと同時に、今それが出来る立場にいる自分が幸福感に浸っているのに気がつきとても嬉しくなった。競技の成績は、祖父と孫が仲良く予選2日間で152ストロークの同ストロークで決勝に進出したが、息子は予選落ちになり残念であった。

なお、ご参考までにその年の優勝者は現在プロゴルフトーナメントで活躍している宮本勝昌、二位は丸山茂樹、三位が片山晋呉と日大勢の独占でありました。